

未来を創造するリーダーを育成するために ～授業づくり・進路実現・そして「志」の育成～

本校は「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」を軸に教育活動を推進しているが、そのうち学力向上のための授業づくりや第一志望を実現する進路指導、理数系人材やグローバル人材の育成、リーダーとしての資質の育成の取組について報告する。



しもやま しのぶ
県立越谷北高等学校 校長 下山 忍

1 はじめに

本校は、平成25年度より3年間、県から「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」の指定を受けて取り組んでいる。指定を受けているのは、本校を含めた浦和、浦和第一女子、大宮、熊谷、熊谷女子、川越、川越女子、春日部、不動岡の10校である。

この事業の趣旨は「未来を創造するリーダーとして活躍する資質を持った生徒に対し、学校の枠を超えて、切磋琢磨させることにより、基盤としての学力を向上させるとともに、チャレンジ精神、忍耐力、共感力、公共心などのリーダーの素養を身に付けさせ、主体的に未来を切り開くリーダーとなる人材を育成する。また、そのために、学校の進学指導力をさらに向上させる」(下線は筆者)というもので、①学力＝進学実績の向上だけでなく、②情意面からもリーダーとしての資質向上を図るところに特徴がある。

今の子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性がある。そうした厳しい時代を生き抜くためには、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協同しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要であり、学力・進学実績のみに特化せず、全人格的な育成を目的とすることには大きな意義があると考えている。以下、本校の取組の一端を報告したい。

2 学力を向上させる質の高い授業づくり

(1) 授業力の向上

学力向上の基盤となるのが、何と言っても平素の授業である。本校は50分授業であるが、集中力を維持させ、チャイム・トゥ・チャイムの真剣勝負である。7時間目の設定や土曜公開授業の実施、

そして授業振替を積極的に行うことで授業時間の確保に努めるとともに、質の向上を図るために、年2回の「授業研修週間」を設けている。この期間は教科を問わずお互い同士誰の授業を参観してもよい。さらに、教科ごとに授業者を決めて重点公開授業を行って、その振り返りのための教科研修会も行っている。毎年、研修テーマを設定しており、それに基づく授業研究を意図している。平成25・26年度は「コミュニケーション力の育成」、平成27年度は「学力向上を達成する質の高い授業づくり」である。

(2) 授業評価と学習状況調査

本校では、生徒による「授業評価」を実施しており、その結果は各教員にフィードバックする。率直な生徒目線を謙虚に受け止めることは授業改善に欠かせない。さらに生徒の「学習状況調査」も実施しており、学年別に集計して分析し、学習指導・進路指導等に活用している。

(3) 教科会の組織力強化

学力向上を直接的に担う組織は教科であることから、教科会の組織力を高めることは非常に重要である。本校では、分掌・学年とともに各教科も「自己評価シート」を作成し、入学から卒業までの3年間を見通した指導戦略を立案し、各時期の模試やセンター試験等の分析で検証している。



学力向上を達成する質の高い授業を目指して

3 第一志望を実現させる進路指導

(1) 一人一人の進路実現

本校進路指導の目標は、「生徒一人一人の個性を生かし、自ら選んだ進路希望を実現できるように具体的・实际的な指導・援助を行い、卒業後も伸び続ける人材を育成する」ことにある。そのために、年間に個別面談を2回以上行って生徒理解を行い、進路ガイダンス・講演会を10回以上、「進路だより」を40号以上発行し、進路情報の提供を行っている。「卒業後も伸び続ける人材の育成」は、生徒理解を踏まえた学部学科研究・在り方生き方指導等を内容とするが、これは「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」の趣旨とも合致する。

(2) 組織的・計画的な進学講習

平素の授業を補完し入試対応力を錬成するために、年間を通して進学講習を実施している。教員個人ではなく教科会として担当しているところに強みがある。今年度、授業日の早朝・放課後に行う「平常講習」は18講座、「夏期講習」は90講座を設置した。このところ、標準的な講座のほかに、難関大学を目指す成績上位者対象の講座を開講する傾向がある。講習はほぼ毎日開講しているので、進路指導部が調整してコマ組みをしている。

(3) 第一志望の実現

平成26年度本校卒業生の「現役合格率」は89%であった。現役で合格させる実力を身に付けさせることは大切であるが、「大学全入時代」と言われる現在、第一志望校に進学させることが重要である。そこで、今年度の進路目標として、「第一志望校（6月段階）実現率」40%を掲げた。昨年度11月段階での第一志望実現率が30%弱であったことを考えると、かなりチャレンジングな目標とも言えるが、夏季休業中の指導につなげるメリットを考えた。

(4) 難関大学への挑戦

「国立大学合格者数」も進路目標として重要である。生徒にとって5教科7科目の受験勉強は決して楽ではないが、それを貫く中で身に付く持続力と幅広い教養は、将来必ず役に立つはずである。それから「難関大学受験者数」という進路目標も掲げている。旧帝大などの難関国立大学は、センター試験で高得点が求められるだけでなく、論述を中心とした二次試験の配点も高い。その挑戦はチャレンジ精神の涵養につながるはずであるが、進路実現のためのバランスのよい学習をどう支援するか、という点については、学校としての戦略的・組織的指導が求められていると言えよう。



大学進学に役立つデータを完備した進路閲覧室



越谷北高進路指導オリジナル資料

4 理数系人材の育成

(1) 理数科における学び

本校には、平成元年に松山高校とともに県内で最初に理数科が設置され、以来理数系人材の育成に力を注いできた。科学技術立国をめざす我が国にとって、次世代の理数系人材の育成は喫緊の課題である。本校でも、将来研究者として活躍することも念頭において、実験・実習を多く取り入れた授業を行うとともに、野外実習、実験合宿、講演会、課題研究など多彩なプログラムを実施し、理数に対する興味関心を喚起し、「科学的なものの見方・考え方」をトレーニングしている。

(2) 大学卒業後の進路

理数科では平成21年3月卒業生の追跡調査を行ったが、大学院に残って研究を続けている者、研究職になった者、大学で取得した資格を活かして専門職になった者、教職に就いた者など理数系の分野で活躍している様子が窺えた。また、卒業生同士の結びつきも強く、高校卒業後6年経った今でも連絡を取り合う者が多いとのことである。こうした人的つながりも彼らにとって将来に亘る財産であろう。



理数科の授業風景「理数生物」

(3) 彩の国理数科ネットワーク

県内に理数科をもつ高校は6校あり、「彩の国理数科ネットワーク」を作って交流している。全国的には理数科を学科転換したり、廃止したりする傾向も少なくない中、「理数科」を持つ学校が増えているのは、本県の強みであるとも言える。また、同じ東部地区の春日部高校、不動岡高校と連携した「サイエンス教室」も実施している。県内のSSH指定校も含め、今後も他校との学び合いをさらに深め、理数系人材の発掘・育成に貢献したいと考えている。

5 グローバル人材の育成

(1) 生徒の海外派遣

本校では、「高校生海外大学等短期派遣事業」として毎年夏季休業中、14日間の日程で、カナダ・ブリティッシュコロンビア州ビクトリア市にあるロイヤルローズ大学に希望生徒を派遣している。現地では、語学研修のほか、リーダーシップ・プログラムや環境学習プログラムを受講している。

また、県の「グローバルリーダー育成塾」にも積極的に応募し、例年複数の生徒をハーバード大学、マサチューセッツ工科大学に派遣している。今年度は「県立高校メキシコ州派遣交流プログラム」もあり、とても有り難いことだと思っている。

参加した生徒の報告書を読むと、一様に海外に目を開くとともに、帰国後の学習意欲が高まっている。我が国の伝統文化や習慣等に改めて気付く生徒もいる。そうした貴重な体験を他の生徒にも共有させるために、本校では帰国後に全校生徒対象の報告会を実施している。

(2) グローバル人材とリーダー育成

グローバル人材とは、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対

する理解と日本人としてのアイデンティティを持つ人材と定義されている（文部科学省「グローバル人材推進会議中間まとめ」、下線は筆者）。

これを見ると、グローバル人材とは、語学力を前提としているものの、そこにとどまらず全人格的な資質向上を求めており、本県の「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」とかなり重なる部分もある。英語はもちろんであるが、それ以外の教科、さらに学校行事や部活動の中でも育成していく内容である。

新しい取組を立ち上げるというよりは、従来の教育活動をそのグローバル人材育成の視点から位置づけて再構成するという発想が大切であろう。

高校生海外大学等短期派遣事業
(カナダ・ロイヤルローズ大学)

6 県主催事業への積極的参加

(1) 訪問セミナー

「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」では、生徒対象の①東日本被災地、②先端施設（JICA等）、③医学部（自治医大等）の訪問セミナーが実施されている。本校では、学習指導委員会が主管して生徒の積極的な参加を促しているが、特に「東日本被災地訪問」に参加した生徒たちの報告書を読むと、彼らがその場に身を置くことで共感力や公共心を涵養したことが分かった。他校生との学び合いも大きな刺激となったようである。関連した事業に「高校生のための対話型講義『白熱教室入門』」もあり、アクティブ・ラーニングとの関係からも注目される。

(2) 世界の哲学・芸術文化アカデミー

これも県の主催する事業であり、古典や芸術作品から学びを育むプログラムである。豊かな教養に基づく確固たる人間観や世界観はリーダーの素養として必要なものであると考えている。

幅広い教養ということでは、読書活動が重要で

あるが、以前に比べて読書量が減少している懸念もある。本校では、授業の中で関連する本を紹介することを心がけている教員が多いが、国語科が中心となり、平成26年度から50冊以上読破した生徒への表彰制度も始めたところである。

7 リーダーとしての資質の育成

(1) 部活動や学校行事

部活動や学校行事の活性化については、従来より重視して取り組んでいるが、リーダーとしての資質の育成という視点からも重要である。とりわけ部活動は異年齢集団をもとにしており、上級生と下級生との関係性から大きく学ぶ面がある。体育祭などの縦割り団編成も同様に上級生としてリーダーシップを発揮する場面が多い。さらに、共感力や集団への帰属心を高める上で重要な機会であると考えている。

(2) 自己マネジメント能力

「三兎を得る」という言葉もあるが、部活動や学校行事を勉強と両立させるためには、如何に無駄な時間をなくして効率的に時間を使うかが求められている。こうした観点から、本校では、平成25年度にスティーブン・R・コヴィーの「7つの習慣」に基づく「自己マネジメント能力」の育成に取り組んだ。平成26年度からは、生徒全員に本



望ましい人間関係を育てる「修学旅行」

校版システム手帳とも言える「(学習)記録ノート」を配布し、時間管理のツールとして活用させている。

(3) 社会貢献への「志」

「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」では、各校でその趣旨に基づく講演会を実施することになっている。本校が平成26年度に実施した「リーダー育成講演会」は、①さいたま文学館サポーターの川添能夫氏による「高校生世界へはばだけ！ Girls&Boys be Ambitious!」と、②獨協医科大学准教授の木村真三氏による「私が研究者を志した理由～誰のための研究なのか」の二つであった。①は、前述したグローバル人材の育成に関連する内容であり、②は「学問は世のため、人のためにある」というメッセージであった。

自らの志す学問と真摯に向き合うことは、大学進学を考える上で最も大切なことだが、「ノブレス・オブリジ」という言葉もあるように、高度な学問を志す者は、強い規範意識とともに、自らの学問を通じて社会貢献を果たすという強い意志がなければならない。私は、リーダーとして最も重要な資質の1つではないかと考えている。



高い「志」のための「リーダー育成講演会」

8 おわりに

以上、本校における「未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト」に係る取組の一端を紹介した。全力を挙げて学力向上＝進路実現に取り組んでいるものの、進学校としてまだまだ発展途上と感じることもある。この事業に係る授業公開・研究協議会を平成27年11月6日(金)に予定している。積極的に御参加いただければ幸いである。



全力疾走の「体育祭」